

第11回日本抗加齢医学会総会

11th Scientific Meeting of the Japanese Society of Anti-Aging Medicine

会期 2011年
5月27日(金)・28日(土)・29日(日)

会場 国立京都国際会館 (京都市)

会長 木下 茂
京都府立医科大学大学院医学研究科
視覚機能再生外科学 教授

主催 日本抗加齢医学会



アンチエイジングの

—An Enlightening Focus on the Future Anti-Aging Medicine—

心の眼を拓く

プログラム・抄録集



一般口演5 5月27日(金) 13:50 ~ 14:35 Room C-1

005-2

アルツハイマー型認知症、およびレビー小体型認知症の周辺症状におけるフェルラ酸、ガーデンアンゼリカ化合物健康食品「F」の有用性

○金谷 潔史¹、阿部 晋衛¹、酒井 稔¹、藤井 広子¹、小泉 潔²、岩本 俊彦³

¹東京医科大学八王子医療センター 老年病科、²東京医科大学八王子医療センター 放射線科、³東京医科大学 老年病科

【目的】「F」(フェルガード)は、米ぬかから抽出されたフェルラ酸と西洋トウキであるガーデンアンゼリカから成る健康食品である。近年、「F」がアルツハイマー型認知症(DAT)、レビー小体型認知症(DLB)やピック病、脳血管性認知症等の周辺症状(BPSD)に有効であったという報告がある。また、動物実験ではあるが、「F」が β アミロイドの凝集を阻止、老人斑の形成を抑制したとの報告もある。しかし、健康食品であることからその知名度は低く、効果に疑問を持つ医師も少なくない。そこで、「F」が認知症の症状に対して本当に有効なのかを、認知症患者に投与して前方視的に検討を行った。【対象および方法】八王子医療センター老年病科外来通院患者で、アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症の診断が確定しているもの24名(DAT 20名、DLB4名。男性10、女性12名、平均年齢78歳)を対象とし、観察期間を4ヶ月として、同一患者で「F」を1日2包(朝夕2回)を最初の2ヶ月内服するA群12例、後半2ヶ月内服するB群12例によるクロスオーバー試験を行った。評価方法は、認知症に伴う精神症状の評価尺度であるNeuropsychiatric Inventory(NPI)に介護者の負担度(distress)の評価をつけ加えたスコアNPI-Dを、認知機能検査としてMMSE、ADAS、うつスケールとしてGDS15をフェルガード内服前後で施行してそれらの変化を検討した。さらに画像試験として投与前後でSPECT検査を行い脳血流の変化をSPM8によって検定した。【成績】B群は検査中であり結果はまだ出ていない。検査終了したA群12症例において、平均NPI scoreは、内服前の18.08から内服後は10.58まで有意な低下($P=0.003$)を認めた。また、負担度のscoreも12.17から7.50まで有意な低下($P=0.000$)を示し、フェルガードのBPSDに対する改善効果を示した。投与前後におけるMMSE、ADAS、GDS15のスコアに有意な差は得られなかった。SPM8を用いた脳血流量は、「F」投与後に右後頭葉、左小脳半球に有意な上昇を認めた。【結論】「F」は、DATやDLBのBPSDの改善に有効であると思われる。